

学 位 論 文 要 旨

氏 名 阪東 哲也

題 目 情報モラル意識の形成に及ぼす個人内特性の影響

本研究の目的は、個に応じた情報モラル教育の在り方の検討に向けた基礎的知見を得るために、情報モラルに対する意識（以下、情報モラル意識）の形成に与える個人内特性の影響を明らかにすることである。

本論文は、緒論と結論を含め全 7 章で構成されている。第 1 章では、本研究の目的を踏まえ、情報モラルの捉え方、情報モラル教育の動向、情報モラルに関する心理学的アプローチの先行研究について整理した。その上で、情報モラル判断を道徳的判断の一つとして捉えた上で、道徳的判断プロセスには個人内特性の影響が見られることを考慮し、情報モラル意識と個人内特性の関係性の検討を研究課題として導出した。具体的には、(1) 道徳的判断に立脚した情報モラル意識形成に影響する個人内特性の探索的検討（以下、研究課題 1）、(2) 情報モラル意識の下位領域に影響する個人内特性の同定（以下、研究課題 2）、(3) 個人内特性と情報モラル意識の俯瞰的な因果関係の検証（以下、研究課題 3）を研究課題として設定した。また、個人内特性の影響を的確に把握するために、(1) 情報モラルに関する経験を有していると想定できること、(2) 発達段階的に個人内特性が安定していると想定できることの 2 点を考慮し、調査対象を大学生とする研究計画を立案した。この研究計画に基づき、第 2 章から第 6 章において各研究課題に以下のように対処した。

まず、研究課題 1 に対しては第 2 章において、情動を含めた直観が道徳的判断に影響するという知見に基づき、情動と認知が統合された情報処理過程に関連する個人内特性として情動制御を取り上げた。分析の結果、情報モラル意識形成に対して、「他者の情動評価」及び「情動の利用」の影響が認められた。この結果から、研究課題 2 への対処に向けて、[指針 1]他者の情動に注意を向け、よりよく理解しようという意識を高める個人内特性、[指針 2]自分の目標の達成のために、自ら意欲を持続できるように自分の情動を適切に利用できる個人内特性の 2 つの指針を得た。そして、[指針 1]に基づき第 3 章では自他の権利尊重、

第4章では情報の安全な利用を、[指針2]に基づき第5章では健康維持に関する情報モラル意識に対して、それぞれ以下の通り個人内特性の同定を行った。

第3章では自他の権利尊重に関する情報モラル意識に対して、他者の情動に注意を向ける個人内特性として自尊感情と、他者の情動を読み取る個人内特性として他者理解力を取り上げた。分析の結果、自尊感情が低く、他者理解力が高い人において自他の権利尊重に関する情報モラル意識が高い傾向が示唆された。また、第4章では情報の安全な利用に関する情報モラル意識に対して、他者、集団や社会といった相手の情動を含めた状況を把握し、適切に対応できる個人内特性として、社会的自己制御を取り上げた。分析の結果、社会的自己制御のうち、持続的対処・根気、感情・欲求抑制の効果が認められ、社会的自己制御が高い人において情報の安全な利用に関する情報モラル意識が高い傾向が示唆された。そして、第5章では、健康維持に関する情報モラル意識に対して、自分の情動を適切に調整・利用できる個人内特性として自己効力を取り上げた。分析の結果、自己効力が低水準にある男性において、健康維持に関する情報モラル意識が低く、インターネット依存傾向が強い傾向が示された。

第6章では研究課題3への対処として、第3章から第5章で同定された個人内特性と情報モラル意識との俯瞰的な因果モデルを構成し、各関連性の一義性を検証した。共分散構造分析の結果、自他の権利尊重には自尊感情と他者理解力との関連性、情報の安全な利用には社会的自己制御のうち、感情・欲求抑制との関連性、健康維持には自己効力のうち、行動の積極性との関連性、インターネット依存には、自己効力のうち、失敗に対する不安と能力の社会的位置づけとの一義的な関連性が認められ、情報モラル意識の下位領域と個人内特性との構造的な因果関係が明らかとなった。

以上の各章で得られた知見に基づき第7章では、情報モラルの指導内容に加えて、それに対応する個人内特性に着目した指導を同時に行うことの重要性を示した。その上で、個に応じた情報モラル教育の実践方法として、(1)個人内特性に応じた個別的な学習（促進モデル）、(2)同質特性集団による相互作用を用いた学習（支援モデル）、(3)異質特性集団による相互作用を用いた学習（援助モデル）の3つの学習モデルを提案し、個に応じた情報モラル教育の実践に向けた今後の課題を展望した。